



諸國
奇談
西遊記
上

ル 3
474
2.





京西
上四
都仙
下吉

3
474

西遊記卷之二

冷暖玉

といふ一玄宗皇帝此沖時日奉より黒白自然の基を以て
 其石を不暖不冷と云ふなり故に冷暖玉といふ日
 かに此御池といふなり其池に集真珠なり其珠と云ふは
 産するは甚遠きは冷暖玉なり帝と希代の秘寶なりといふ
 事と云ふを愛ししやと云ふ事八幡譯史など其外産物の書籍に
 多く見ゆなり予も九分に於て一付豊後不毛所なりといふ事
 をもつたなり其産地は東南の方に入る事ありこれ
 山嶽やと云ふは先花舟なり其産地は北吹あり此よりいふ

西遊記 卷之二

5



西くは若名を此身なる名を多し一此の如きもの瀕に終里
の石を白自然の基をりて一此の如き人敬せしは此の
石なりと云是亦此の如きなり

此の如きもの色若くは白砂あり他は此の如きもの
金石を好む人ハ此の白砂と此の如きもの如きものを
限らざるなり

赤馬の如きもの世の人若くは此の如きもの
と云ふものも此の如きものの上なるものも此の如きもの
澤よりと云ふものも此の如きものも此の如きもの
と云ふものも此の如きものも此の如きものも

や

長湯の山よりをき以て堀石と云ふ新法此の如きもの
ありて、と云ふなりと云ふものも此の如きものも
と云ふものも

大隅の如きもの名を此の如きものも此の如きものも
石碑の如きもの名を此の如きものも此の如きものも
す人し又よきものも此の如きものも此の如きものも
百年此の如きものも此の如きものも此の如きものも
と云ふものも此の如きものも此の如きものも
て老母の如きものと云ふ此の如きものも此の如きものも

又まよと彫り船よはさそふ人の舟もつとらる候里の御上
と趣く恙なく美く忍ね老母を養うー思ふ谷よ建をぬきま
ゆらううなるといひくそとそとてハ器の音あり候に
橋のうらげをき名を聞きたりといひくそと堅くさすに
うりてを日年中ととくふー故ふと器の音を聞きあそ
と石陣ゆかむげ石を以て作り入り長橋をふり着けり
て且やううなる候處ハ石を中へゆきくうなるに
南むと石階ゆきくうなる候處ハ石を中へゆきくうなるに
ハ陣ふやううなる候處ハ石を中へゆきくうなるに
壯存五八代西白浪とくうのふきう時大石ありてきまき、

且く海邊に石をまきくうなる候處ハ石を中へゆきくうなるに
とく城の町くみと清けなるまきう玉明徹澄みなりて玉の種
候なり俗ふまを壯俊馬とくうのふきう時大石ありてきまき、
つさりのなる

薩州北郷くみと水精多一玉務候ハカ案由とせ候多一平
とそをんる案由なりゆ人小人候ゆきとてあつて同大下
村とを黒い所なり道は又はこれあり信分和四味の間
より候なり

肥前小浜村の音集赤七黒の白色の海石ありて馬鹿なり
大村領の音流又ハ石を聞きたり候處ハ石を聞きたり候處

このりうをて横も一人をくわのちをけりたり、築とく
初う喉と白す、馬身とすうとあ、て世名と稱、なり
臨豫乃屬鴻、うり、歳のとに、細石を、あ、う、は、ひ、う、と、出、白
あ、て、青、お、も、う、信、中、う、う、あ、る、石、を、示、似、う、う、に、似、る、處、に
白、石、角、う、肥、老、の、依、信、依、の、依、石、也、又、世、を、按、最、り、の、なり、經、源
山、僻、地、也、ハ、横、く、の、青、石、塊、也、あ、る、さ、ま、さ、の、ま、人、く、う、す、今、と
ま、る、う、ふ、を、も、た、す、め、

孔明の陣を散

蜀の武帝は、なうて、清和と國號を、あ、て、た、世、を、安、順、の、善、主、
あ、た、い、て、今、と、月、く、に、江、海、を、平、の、化、を、も、た、し、先、を、示、す、て、

此、事、を、漢、史、に、う、り、横、く、の、青、石、塊、也、あ、る、さ、ま、さ、は、魏、史、に、
蜀、帝、の、善、主、と、征、伐、の、時、に、は、地、を、も、り、用、ひ、ら、し、と、陣、を、散、ら、
す、の、内、も、の、所、に、あ、る、う、り、集、り、ぬ、横、の、あ、る、と、も、た、下、に、証、を、と、
し、て、お、由、係、く、ま、り、う、水、火、の、ひ、く、を、の、り、ま、り、あ、り、い、く、と、
う、も、や、志、も、さ、う、う、り、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、
正、壽、あ、り、し、し、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、
し、て、炭、取、と、う、り、用、ひ、居、う、う、り、あ、る、珍、器、と、い、ふ、志、を、す、し、と、
其、器、は、周、に、は、く、し、あ、り、う、り、く、は、さ、と、な、る、か、け、を、は、り、く、と、
わ、る、と、く、く、物、を、は、り、炭、取、と、ま、う、く、ぬ、う、と、を、は、り、清、水、と、く、は、
し、て、身、に、服、の、裏、に、篆、書、は、り、録、を、う、り、は、り、金、に、て、記、念、を、

く打延して張るる 鞆皮ハ用ひすは八南雲温温の由人小
鞆皮ハ用ひくは此の由人走とく入る所細の権取一く法取よ
リそくひありし 雲守分と遠のぎりたれとち西野の
らすも希代の名器とゆふと 珍重をさくすはくは屋人
ゆふくは 雲守分と遠のぎりたれとち西野の
おゆすつく 雲守分と遠のぎりたれとち西野の
こも目きす 雲守分と遠のぎりたれとち西野の
お乞お夫しくとと 河守ち西野の
夫より我おめえのり なるびさくは法取く人さん
我のえあす 日本のお守り なるびさくは法取く人さん

法くす 雲守分と遠のぎりたれとち西野の
ぬりく 雲守分と遠のぎりたれとち西野の
又ひさく 雲守分と遠のぎりたれとち西野の
名長崎の 雲守分と遠のぎりたれとち西野の
大雲と 雲守分と遠のぎりたれとち西野の
て今も 雲守分と遠のぎりたれとち西野の
雲守分と 雲守分と遠のぎりたれとち西野の
正記 雲守分と遠のぎりたれとち西野の

飯野の国元

日他五 雲守分と遠のぎりたれとち西野の

ちくちくとして人よ揚々もんとていひ 暮日さなうともかきひ
 光くすすにま夜との種傳分り首とあそとと毎の解時あひ
 とも又やりのおきともといはくともそれといふ屋敷をうり
 となも色ハ只茫然とてあき色居さうしうぼりくともを
 つらけたる脚一層を時あそそをうしうあ人さややあひん
 只いぶくしにハけ風完の中なる麻の所又り ともさうい
 て我知と進ひ入うしなるんさあうハいうなるあ中一記さ
 うありて我かの雲ああひしともうり 紙一とけ完にみう
 てま香とそとくもんとのことと 心いひ我さあにゆり 繩と松
 明ともあきうりい完よ入らうとて 用意とさうす 妻子明あひし 竹

城んくた小藤ささひししうり 藤のあきさるる 彼風完いっなる
 雲があひんとともりうしう 終にまを是れ女の生あんとは身と
 輕んすも事切さうりなうともく 小藤あき事あうとて 泣院とて
 為しつと大を越さうし小ま入るるを塔くにいしとぬあひとな
 しと彼風完ふれとひきねせひ多くと塔へ 後ひりぬ方を遠
 へ 勝ん細川の橋と付えあるま藤を帯へ 左のとも小松明と
 うともしとさうし 官の藤さうし け程を引うかきれよふしあどへ
 しと 湯来しとけあは官の中れを入らるるともく 小藤あひ
 るおとさう 又斜ふりあもさうてや 湯くわらる 藤小地中
 らのあて 湯あさうと平なる新まらうし 付ね松明と心とあき

城居もいふ事あるは入つて年久敷なり朽ふるか橋つてうくや
 らうかたをさうりたりけし雨より奥の宮あり細く成つてたお
 几より進つてうい侍も此方あり入るつとと地も厚と成つて
 徹るれたの方れ穴の層もあつてあすうに女の侍もいふ
 由きうのうをたの宮も入るも厚きも限つてうい御いあ入
 るにあさうのしを女の侍もあつてあすうの侍もあつてあ
 ての侍もあつて御おを知大を思つて福もあつてうは親主人の
 ありと知く力を得て成つてうさうもあつてあすうもあつて
 八善ありま地志ありく平ありま向ありま大阿流もあつて
 ちのあつてあすあもあつてあすうのあつてあすうのあつて

無事いふ事あるはあつてあつてあつてあつてあつてあつて
 海も千幸万苦つてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
 りあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
 うくくあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
 物もあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
 以候もあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
 先と式あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
 又綱もあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
 んとすもあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
 人れの中もあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

んとせししよち海の網のりう来るをんくえづりく網を
 らまを引物うう。にんく候ひの程死引あき々、再ハ死せる
 との、よすううまらゆ地て暮らうりしを候あうう。唐此
 仍事と候るれちもんううううううううううううううううう
 迎入りし。かの追ひ入ううううううううううううううううう
 きばうううううううううううううううううううううううう
 ま時の中、すとまう人さあ人くわうううううううううううう
 多領の人ハかくれうう死生をううううううううううううう
 胎もつり

唐頼史婦對面

大隅國之内正八幡と大社ありて宮殿のやまをいぬき
 ちあうううううううううううううううううううううううう
 司にいらふ素細氏なるやうううううううううううううううう
 に西製むりうううううううううううううううううううううう
 へての唐史とたうううううううううううううううううううう
 と唐うううううううううううううううううううううううう
 唐史の三人唐史うううううううううううううううううううう
 のき免弟人登うううう唐史の室唐史ううううううううううう
 ぼうあううううううううううううううううううううううう
 びあうううう唐史ううううううううううううううううううう

をしと遊ぶと今生かすひも不情なればなりとて泣
 り今て又おんちの思ひ出さうとてさき中とてひの
 女の身れりさす人なくとて身はゆりたるあはれ
 ひとをなすふよきにれなると涙あはるとさうく
 ちの海ち氏とてあはれ感へさあはれ秋ふさく
 へ折るに船よせぬあはれ海にせんとなす打具
 隅にくうぬまはりうううううううううううう
 あくあはれ海あくくくくくくくくくくくくく
 とく我あはれ思ひぬく秘なくあはれ相玉の怒り
 頼成経の二人とて海にたれは又大隅玉かた本

つうけ中ぐく宮内の心懐まは清くさうく
 の室隠くあはれあはれあはれあはれあはれあはれ
 婦れ對面ありたりとてさうくあはれあはれあはれ
 ちちちちちちちちちちちちちちちちちちちち
 とてあはれ社中の思ひ出さうとてさき中とてひ
 つくさき家とてさうく

龍

薩の海に海の中に龍の海の中に龍の海の中に
 る龍のちちちちちちちちちちちちちちちちち
 然るちちちちちちちちちちちちちちちちちち

とれそつとつと小辺世阿彌院より畢法比平の長き天らり
 ぐつと某多に清く〜中角に方なるぬらすこわいも〜漸
 ある某多に清く〜^{いろかみりい}なる時のもくなる
 とつとわなうとつと〜形もあふ法のもく〜と
 高のそつ〜紅姿のこのなりはわのの初に長崎阿彌院通す
 寺維^{フシキ}孝なるの阿彌院より畢法比長き四人よりわを清く
 る〜とわをせつ〜志勇徳〜と人〜とんごの食んとするの音
 なる〜の長崎阿彌院〜わを困公に〜と〜あや〜種なり〜きほひ
 けせ〜のり〜あや〜ほのふら吉維氏わをせつ〜と〜平々
 長崎に移〜は八幕法流不死中〜けけ〜とん〜りに本末綱
 目は〜だり〜長き〜あふ〜あ〜の〜き成〜吐〜雲〜と〜雨
 を波す〜と〜つ〜と〜ま〜と〜ま〜ぬ〜つ〜さ〜ゆ

十六日様

伊豫木松ふれ城下北よ山城とつとわありは〜れ〜十〜白
 様〜と〜あ〜の〜西月十六日〜ふ〜け〜さ〜く〜満家〜と〜見〜せ〜たり
 松ふ〜つ〜り〜程〜見〜と〜と〜黄砂^{くんと}〜群^{ぐん}〜集^{しゆ}〜中〜寒^{ふゆ}〜音^{こゑ}〜面^{おもて}〜と〜と〜解^と〜雪^{ゆき}〜積^{つみ}〜と
 封^{ふう}〜つ〜の〜は〜は〜は〜さ〜く〜く〜れ〜え〜き〜き〜め〜せ〜く〜暖^{ぬる}〜也^や〜色^{いろ}〜ハ〜き〜進^{しん}〜の〜人
 と〜と〜よ〜と〜く〜と〜布〜と〜結^{むす}〜不〜ま〜な〜き〜も〜と〜也〜一〜年^{とし}〜先^ま〜吉^{きち}〜寄^よ〜より〜和
 文^{ぶん}〜に〜沙^さ〜阿^あ〜範^{はん}〜京^{きやう}〜於^お〜此^{こゝ}〜冷^{ひや}〜泉^{いずみ}〜泉^{いずみ}〜人^{ひと}〜は〜花^{はな}〜と〜諸^{しよ}〜事^じ〜を〜ひ〜く〜り〜あり〜と〜耐
 冷^{ひや}〜泉^{いずみ}〜屋^や〜より〜由^{よし}〜延^の〜年^{ねん}〜に〜沙^さ〜阿^あ〜奇^き〜あり

十六日さうとうとふ花とびしと腹月はらつきはれ生なまうりにお
せし波東の河原に歌にまうはきと色とらうりしかり
このうれ神意かみいはれならん常歌とこたの輝

きよのころ 雲のとるねん 奉ぐれ

ひ月ひつき かくらふ 神花かみはなは

その春の 柳のふれは それとやぶ

をあらむ 古歌ふるたのまや 昔歌むかしうた

わし物ものを 数かずの風は たよりとそ

かき人れ 尼にせら申まを 折をりせらとそ

りかた種たねをば

反歌

神春の神を操とらえりしに歌の柳のまゆりおそなる
程ほどはゆれ歌うたに侍人しやくじんか人ひと誰人たれひととらん人ひととふ吟ぎん傳でんを
既すでに平ひらら波なみ雨あめに花はなの口くち月の夜よなりしうか花はなの時ときふれ
くもそらんさうき油あぶらうまきさうきなり波なみの人のけは様の雨あめ
とやふむしし山やま越この里さとに老人らうじんをらんか奉ほう対たい承じやう老らうとま
き病やまひのふしねとまうらうらうらに只ただは谷やの極たぎに先まを
むとと見みすしと死しうらんすれとなまきまを今いまつらひと
んて死しうらん海うみ世よにといのふ事こととあらとらとせらに
へりぬまうらうらとまげまをば極たぎの末すえに中ちゆうまのめを

我々の此の如く多かるる前にて候も、
 一々天竺に、この如く候ひらるるを、
 あん一様の所にて候れども、
 多うけられり、日西月十六日なり、
 又西へ向うぬ又伊勢玉向うと、
 き寺あり、ま寺内に不図様とて、
 只二の所候ふに、ま候ふ候へ、
 先く是候る候なり、結を、ま候ふ、

候る事、世ふとも、ま候ふ、
 内より候る候あり、
 義中に候る多、
 湯桶とて、
 候ふハ人、
 領分あり、
 必く、
 所あり、
 候る事、

るの上の方より先をさしし紀事へも外蘭と地ありてよ
 く栄へ育つ蘇鉄ハ他田に押造りハ一山のまゝす蘇鉄な
 るあり又山川とのみわに於眼肉の樹又ハ橄欖樹と栄
 一層色つるまゝと南を暖きなまハ坊ととつりかに生るん
 伴種も仔細などの様ハ石と後の事ととなん

總論

七月代におあつら何もの地ありとあるの中に長崎と評にす
 くもく作ふなうも海に地の裏示と皆印方れ山乃す後小あ
 りと町よりとよくおらんゆりハ盆中ハ各灯籠とつりす
 なつとめをふにとらん二つ二つ家よりハ裏に十こ

十北灯籠とつりせりえ東致の方れ無きるに又致双信の灯
 燦るもハ幾多方とつり小程とあす夜に入らハ四方ハ山皆
 火と成くもらんも海にの天祥ありとつりも推つり
 扱十六日十六日家とれ裏ありとつり人々ありとつりて
 別酒肴と推つりも裏にありとつり也往への馳走なうと推
 一々終日終夜酒宴と設置れハとつり也味海尺ハのまぐ
 めと推入つりも常ひとつり也又海の裏所とけいぬるもとつり
 地なとつりも常ひとつり也とつり也人々打漁とつり也
 ひに酒と送る青と赤のつりて大に酒無入る事なう也
 の邊ありれとつり也

一海へあるまゝ申すに、さうして海の中へ入ると、
 て高き木林の枝とくしくまゝなる海の中へ、
 木林の枝は海面より高くまゝなりて、
 枝はくしく入ると、さうして海の中へ、
 先づうの海へまゝ、
 ろり秋の比、
 先づ風長、
 扇風扇とく、
 たり

備大

薩摩の島へ、
 ちうとまゝ、
 叶るまゝ、
 なるまゝ、
 一、又、
 上り、
 に、
 の、
 なる、

